

---

# 天空の姫君

柊ライヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天空の姫君

### 【Nコード】

N3914Z

### 【作者名】

柊ライヤ

### 【あらすじ】

『一緒に来ないか？』

旅先で偶然出会った少年はそう言った。  
護るべき国を失った青年は、ひよんなことから個性豊かな一行と旅路を共にすることとなった。

『俺の、故郷なんだ』

過去、現在、未来。  
芽吹いたばかりの新たな絆。

『お前に、聞きたいことがある』

疑惑。

彼らの旅の目的とは一体何なのか。  
少年は何者なのか。

『どういふことか、説明してくれるな？』

真実を知った青年の決断は　　。

『あなたは、分かっているんでしょう？』

『許さない……！！』

『迎えに来るから……』

『俺を信じる』

『イヤアアアア！！』

『古いんだよ、剣なんてもんは』

『愛してよお！！あたしを愛して……！！』

『これは、想定外ですね』

『あああああ！！！！』

『よく、できました……』

『あなたはこれからどうするの？』

冒険ファンタジー、開幕。

## 〈序章〉

かつて、その大陸には3つの大国が存在した。

平和主義を掲げた聖シユナル王国とランデイス王国。自然豊かな国土を持つ二つの国は、互いに友好同盟を結び、円満な外交関係を築いていた。国土防衛の為に軍事力は必要最低限に留め、しかし有事の際には二か国の総力を結することを誓い合っている。平時は実に穏やかな、それこそ平和の象徴たる国風は、各国を治める領主の人柄ゆえなのだろうか。

そして、その二つの国と隣り合わせに在ったのが、アルカデルト帝国であった。国土の2/3を砂漠に覆われたその国は、他の二国とは明らかに、主義主張も国風も異なっていた。その軍事力は他国の全勢力に等しく、ゆえに対立することもしばしばだった。しかし、平和主義国間で交わされた同盟条約のおかげで、長年に渡り大戦に見舞われることもなく、世界の均衡はこのまま保たれるはずだった。

大陸歴419年、突如としてその均衡が音を立てて崩れていく。軍事国家アルカデルト帝国による、国境侵攻。

幾年月を掛けて密かに増強させられた圧倒的な軍事力は瞬く間に勢力を拡大し、他国を侵略していった。同盟条約の名の元に、平和主義国の連合軍は国土防衛の為に応戦する。

しかし決死の抵抗も虚しく、大陸歴422年、ランデイス城陥落。王国はついに滅亡の一途を辿ることとなる。

程なくして、大陸歴423年、国を治めてきた女王暗殺と共に、聖シユナル王国は降伏宣言を発表。アルカデルト帝国に占領、統合されることとなった。

あれから7年余りの月日が経ち、大陸の大部分は帝国の支配下にあった。かつてのランデイス王国国境に位置する森は魔物の棲みか

となり、手に余った帝国はそれを放棄。大戦の傷跡そのままに、王国はいっしょに死都と呼ばれるようになっていた。

一方、降伏宣言を受諾された聖シユナル王国は、統合とは名ばかりの一方的な支配下に置かれていた。降伏後、帝国側から発表された女王とその娘の死亡と言う事實は、大戦に疲れきっていた人々を更に追い詰めることとなった。そして新たな帝国王として戴冠式に姿を現した人物に、旧王国民の哀しみは憎しみへとその姿を変えていった。

大戦が終わってもなお、各地で小さな紛争が起こり、旧王国民の帝国に対する反発は、圧倒的な軍事力の前にことごとく潰され、人々は逃げるように地下へと身を潜めていった。

誰もが希望を失い、それでも生きる為に築き上げた地下都市で小さな幸福を見出だし始めていた時である。まことしやかに囁かれ始めた噂は大きな波紋を呼び、瞬く間に地下都市中へと広まっていく。

『死んだはずの皇女様が生きている』

。

人々の目に、光が戻った瞬間だった。

く勘違いから始まった(1)

王都クルスメラ。旧聖シユナル王国のかつての都は、今日も人々の喧騒で賑わっていた。中心部から広がるレンガ造りの街並みは、かつて栄えた一国の名残であるうか。

暖かみのある色彩をした建物の間を行き交うのは、華やかな衣装に身を包んだ貴族の方々、我が物顔で道の真ん中を闊歩するのは厳つい鎧が一際目につく帝国軍人である。軒を連ねる商店に陳列されるのは、どれも高値の商品ばかりだ。店先でふんぞり返る店主とおぼしき者達も、そこそこ値の張るであろう装飾品を身に付けていた。さぞ豊かな暮らしを謳歌しているのであろう。

しかしながら、彼らは旧聖シユナル王国の民ではない。帝国により統合された後、本国より移住してきた、アルカデルト帝国民である。

ならば旧王国民はというと、街の片隅に数ヶ所、帝国民は決して近付かない出入口がある。王都を警備する軍人も、決して足を踏み入れようとしない場所だ。地下へと続く階段を降りれば、そこにはもうひとつの都市が存在していた。元は貯蔵用、避難用として設けられていたその空間で、彼らは帝国から身を隠すように生活を始めた。いつしかそれは、ひとつの街として形作られていったのである。始めこそ、絶望に打ちひしがれ生きる気力さえも失ってしまったかのようなだった人々も、元々の国民性がそうさせたのか、地上の賑わい以上に活気付いていた。

そんな地下都市に、一人の青年が降り立った。遠くからでもよく目立つ赤い短髪の青年は、煙草をくわえたまま後頭部を掻いた。

「なんか俺、迷ったっぽくね？」

青年　ゼル・クロードは誰に問い掛けるでもなく言葉を発した。しかしそれは、吐き出した紫煙と共に消えていく。一度立ち止まって辺りを見回せば、ついさつき道を尋ねたばかりの露店の店主と目が合った。気まずい。互いに愛想笑いを浮かべはしたが、居心地の悪さにさっさとその場を後にした。

「絶対迷ってるわー」

諦めにも似た苦笑いを浮かべながら、ゼルは躊躇なく歩を進める。入り組んだ道と似たような風景が、彼の方向感覚を完全に狂わせてしまったらしい。もはや自分が街のどの辺りにいるのかさえも分からなくなってしまうた。

「どーするかねえ」

適当に歩いていたら、見たことのない場所に出てしまった。賑やかだった雰囲気は嘘のように、辺りは静まり返っている。

乱雑に積み重ねられた物資輸送用のコンテナは、埃を被ったままそこら中に転がっていた。地下都市の端にあたるのだろうか。その先に道は見当たらない。錆び付いた格子状のフェンスが中途半端に開かれているだけであった。

「とりあえず戻ってみるか」

楽観的な苦笑いを浮かべたまま、ゼルは元来た道を引き返そうと踵を返した。無事に地上に出れるのかさえ疑問だったが、いつまでもこの突き当たりにいるよりはましだろう。

鼻唄混じりに一步踏み出したゼルだったが、一人増えた気配に反射的に身を隠した。壁を背にして辺りを窺う。

「子供……？」

程なくして現れたのは、ダークレッドのショートヘアをした小柄な人物だった。黒地のロングコートに施された真つ赤なラインが印象的だ。その腰元には、東方の国が由来とされる片刃の剣が携えられていた。長さの違う二つのそれは、互いにぶつかり合って音を立てた。

子供と言うには大人びた、しかしまだ幼さの残る少年は、辺りを注意深く窺うとゆっくりとフェンスに手を掛けた。

錆びた金属が軋む音が、静かすぎる空間に不気味に響き渡った。

「まだ続いてんのか？」

行き止まりかと思われた空間から、少年は姿を消した。もしかしたらそこから地上に出れるかもしれないと、ゼルは見知らぬ少年の後を追うべく駆け出した。無造作に散らばるコンテナを避け、少年の消えたフェンスの向こう側へと足を踏み入れる。

「これはまあ、なんというか」

彼を出迎えたのは、地上にへ続く登り階段でも降り注ぐ陽の光でもなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3914z/>

---

天空の姫君

2011年12月15日08時45分発行